
Articles: Gender Studies

改革開放以降の中国人の性意識の変容およびその形成要因についての考察

HUI WANG

On the Changing Sexual Consciousness of the Chinese Since 1978

It has been more than 20 years since China's 'open door' economic policy was implemented in 1978, resulting in a rapid development that has captured the attention of the world. With this has come considerable change in the Chinese people's lifestyle and thinking, including the area of sexual consciousness. The purpose of this article is to identify the changes that have occurred in Chinese people's sexual consciousness, as well as the major factors that have influenced (and continue to influence) their sexuality. Firstly, it highlights traditional Chinese sexuality. Secondly, by reference to history, it proceeds to clarify the present condition of Chinese sexuality and pinpoint some of the problems that have surfaced as a result of this new sexuality. Thirdly, the economical, social, and cultural factors that have brought about this new Chinese sexuality are analyzed. Finally, it seeks to indicate the future direction of Chinese sexuality by going on to suggest the importance of improving the country's sex education and establishing of government policy that is appropriate to the challenges posed by this sexual 'liberation'.

はじめに

1978年に中国は対外改革開放政策を実施して以来既に20年余り経った。改革開放政策を堅持してきた結果、中国経済の飛躍的な発展が世界からの注目を浴びるようになった。経済の発展に伴って、中国人のライフ・スタイルにおいて大きな変化が起きている。生活水準の上昇につれ、個人を見つめる余裕が生まれて、中国人は「個体」の存在を強く意識するようになり、中国社会の個性化が促進されている。また、市場経済政策の導入によって、社会のあらゆる側面において競争は激しくなり、社会の分化が促され、職種、収入、社会の地位などの面において格差ができた。こうした背景の中、人々の視野や思考様式が変わっており、それに従い中国人の性や婚姻に対する意識において著しい変化が見られている。近年、中国で起きている「独身貴族の増加」、「ネット交際のブーム」、「離婚率の上昇」、「木子美現象」¹などの出来事は中国人の性意識の転換が窺われる。

本稿では、改革開放政策実施以降の中国における社会変動が人々の性意識にもたらした影響と関連づけて、なぜ中国人の性意識は大きな転換が生じたか、これまでの中国人性意識はどのようなものであったのか、また、これからどのような傾向に向かっていくかについて考察する。まず、中国人の伝統的な性意識について論じる。次に、歴史と比べながら、現在中国人の性意識の現状を明らかにし、

性意識の変化によって、中国では性教育の遅れやエイズ感染者の急増のような社会問題がたくさん浮上してきたことを指摘する。そして、中国人の性意識の転換を導く経済的・社会的・文化的要因について分析する。最後に、今後中国人の性意識の変化方向を示し、その上で、存在している問題の解決策として、中国政府の政策、学校の性教育方針の改善などの重要性を言及する。

中国人の性意識の現状 - 歴史と対照しながら

1. 中国人の性の歴史

中国は悠久の歴史を持つ国である。中国の性文化の歴史は同様に古代の中国に遡ることができる。今日の中国人における性意識の劇変は、伝統的な中華思想への反逆と言われている。歴史があるこそ、現在がある。今の中国における性の現状を考察するに際して、中国の性の歴史をもう一度触れる必要がある。

(1) 宋の時代以前 - 開放的な古代の性文化

中国は礼儀の国と呼ばれ、宗教思想を中心として礼儀規範は人々の行動基準となっていた。中国の古代の性文化は道教の思想に強く影響されていた。性に関して、道教は性行為を自然の理法の一つとして肯定し、全ての男女にとって性は神聖な義務であると認めた。そして、漢の時代から、儒教の地位が高くなるにつれ、性に対する規範も厳しくなってきた。一般的に、儒教は禁欲主義の色彩が強く、男女の間の交際を禁止し、女性が無条件に男性につき従う理念を強調していたと考えられる。しかし、儒教思想の創成期では、儒教の唱えていた男女の性に対する厳しい礼儀はまだ完全に重要視されてなかった（江，1995）。代表的な例として挙げられるのは、孟子の「食色、性也」（食と性は本能である）の理念である。したがって、古代の中国において、性に対する制限は存在するものの、性の自由性と開放性は許されていた。これは中国人の子孫繁栄への重視に深く関わっている。

昔の中国人は男女の性的な結合を神聖なこととして重要視していた。「天地の間、動くに陰陽をもつてす。陽は陰を得て化し、陰は陽を得て通ず。一陰一陽、相まって行なわる」²。男は陽で、女は陰と見なされ、男女の性交が陰と陽の融合であり、男と女の性的結合によってこそ、人類が繁殖する。古代の中国では、家系の血統の保持と繁栄は何よりも重要な道德基準であった。「不孝有三、無後為大」（不孝は三つあり、そのうち、後継ぎがないのは一番の不孝だ）や「伝宗接代」（代々血統を継ぐ）という考え方の下で、古代の中国人の結婚の最大の目的は子孫の繁栄とされていた。こうした思想が背景にあって、一夫多妻の制度、女性の離婚と再婚、婚外性交渉は、古代の中国では、ある程度容認されていたのであり、性科学も古代の中国において発達していたのである。Meyer (1986) によれば、子孫をたくさん作るため、古代の中国では複数の妻妾が同じ屋根の下に住むということ、結婚の規範としていた。女性の離婚や再婚は女性の生活にほとんど影響が見られなかった。たとえば、中国の古代伝説の中四つの美女の一人である王昭君は、匈奴と友好を促すため、漢の元帝に匈奴の王の后になると命じられ、遠い異郷の嫁になった。彼女は匈奴の王に愛され、何不自由なく生活し、彼の死後は故夫の長子の妻として大切にされた (Meyer, 1986)。また、

古代の中国では医学として房中術を論じる著書もたくさんあった。たとえば、『玉房指要』、『玄女経』、『素女経』、『玉房秘訣』、『素女方』など、枚挙にいとまがない。女性の離婚と再婚に対する容認や性科学的発達は古代中国の人々が性に対して開放的であったことを示している。

(2) 宋の時代からアヘン戦争まで — 性の保守化への転換

宋の時代になると、性を抑圧する礼儀はいっそう厳しくなり、性禁忌主義が主流となった。宋の時代に儒・仏・道の三教の理論を混合させ形成した「理学」という新しい思想体系は支配的な地位に置かれた。理学とは、新儒教とも呼ばれ、儒教思想をあらためて整理、解釈し、なお、仏教・道教の思想、学説の中から必要な部分を抜き出し、統治者にとって庶民・大衆をより治めやすい思想体系である（胡・島崎，1992）。「理学」が強調された結果、儒教の中で唱えられた「父母之命媒酌之言」（父母の命令、仲人の紹介）の婚姻制度が踏襲されたばかりではなく、貞操思想、男尊女卑の思想などを強調する風潮が根付いた。性の抑圧を象徴する纏足も宋の時代から一般化され、性を規定するさまざまな社会的制約が女性の境遇を著しく変えてしまった。陳（2002）はこの時期の中国社会の婚姻は次の三つの特質を持つと指摘した。第一は、「父母之命媒酌之言」と「門当戸対」（結婚相手の双方の家庭の社会的地位、経済的条件が相当であること）の原則である。これらの原則は結婚しようとする男女の絶対的に守る条件である。婚姻は男女当人のためではなく、家のためであり、家本位の婚姻であった。第二は、婚姻は親のためであり、親こそ婚姻締結の当事者であるということ。第三は、婚姻は男性（夫）を中心として考えられていた。婚姻関係の形式としては一夫多妻制であったし、婚姻は女を娶る形式をとり、婚姻の儀式も男性側を中心に行われ、婚姻生活も男性側で営まれる。宋の時代以降、「男尊女卑」の思想が強く、男性に比べて女性の拘束感はより強くなった。女性は離婚する権利がなく、離婚することも、男性側が一方的に決めることであり、「休妻」と呼ばれた。さらに、「餓死事小、失節事大」（女性は自分の貞節を命より大事にし、貞節を失ったら命を絶つべきである）、「貞女不嫁二男」（貞女は二夫をふまえず）の貞操思想の影響によって、女性の再婚も不可能であった。

上述したように、宋の時代から、中国人の性意識は保守化しつつあり、礼儀と道徳が強調され、特に女性に対して強く束縛し、人間性を抑圧することになった。

(3) アヘン戦争から五四新文化運動まで — 新思想の流入と歴史の残存

1840年のアヘン戦争は中国の近代史の幕を開けた。その後、中国の政治は多元化し、社会は半封建、半植民地社会段階に入り、西洋思想も少しずつ中国社会に浸透しはじめた。1851年から13年に渡り「太平天国」運動は、男女の平等を宣言し、女性の教育や土地の分配を受ける権利を訴え、纏足の廃止、婦人売買の禁止、一夫多妻制や売買婚姻制度の廃止を主張した。太平天国が崩壊した後、儒教的な社会勢力の反動が起こり、女に「三従四徳」（三従とは、未だ嫁がざるときは父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従う；四徳とは、婦徳（貞順）、婦言（言葉遣い）、婦容（身だしなみ）、婦功（家事）で、女性の守るべき道と言う）や「三綱五常」（三綱とは、君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱；五常とは、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり）の伝統を再び守らせようとした。にもかかわらず、太平天国は当時の中国社会に進歩した思想の種

をまいた。その後、清政府の「洋務運動」により西洋の人権論や民主的意識が中国に流入し、その中で西洋のフェミニズムが紹介され、「平等思想」と「婚姻家庭観」が宣伝され、伝統的な婚姻制度に影響を与えた。1902年、近代中国で初めて翻訳された女性問題に関する書物『女権編』が中国に紹介された。西洋思想は中国人、特に女性知識人の間に広まった。

太平天国運動、洋務運動、女性運動は中国人の伝統的な性意識を変え始めた。だが、これらの運動は旧伝統を支持する勢力からの制圧があったため、領土の広い中国の全土全員まで影響を及ぼすことが困難であった。また、数千年に渡って築き上げられた中国人の伝統的な性意識、性文化は一朝一夕に変えるわけにはいかなかった。したがって、近代の中国は、西洋思想が浸透しつつながら、伝統思想も根強く残存していた時代と言える。

(4) 五四新文化運動から改革開放前まで一揺らめく時代

1919年の五四新文化運動は、「独立自主の人格を取り戻そう」を宣伝し、女性を圧制する「三綱五常」や「三従四徳」の儒教思想を攻撃した。この時期、婚姻問題や女権を討論する雑誌や著書はたくさん出版された。こうした社会背景の中、1924年「中国国民党第一回全国大会宣言」には、「法律上、教育上、社会上において男女平等の原則を確立し、女権の発展を促進する」という記述があった。また、1926年の国民党第二回代表大会では「婦女運動決議案」が通過し、男女平等や女性への保護の提案があり、結婚と離婚の自由の原則によって、婚姻法を作るべきであることも提言された（孟・王・呉，1992）。1921年に中国共産党が誕生した。共産党は伝統的儒教思想を批判し、女性の解放を重視し、新しい理念を打ちたてようとする方向に向かっていった。1931年にソビエト政権域内では、売買婚、童養媳³を禁止し、合意離婚と単意離婚を認可し、一夫一妻制、女性の参政権などを確保する法律が制定された（瀬地山，1996；丁，1998）。1949年に、中華人民共和国が成立した。翌年新しい婚姻法が發布され、何千年にもわたる封建的な婚姻形態は法律上否定された。新婚姻法の發布は、中国における婚姻形態と人々の婚姻観の大きな変革を意味すると言っても過言ではない。

しかし、60年代から70年代後半までの中国における文化大革命は、人間としての正常な愛情と男女関係を再び抑圧、束縛するようにさせた。この期間、性にかかわるすべてのことが厳しく批判され、禁止された。性はブルジョア階級の無益な快樂の根元と見なされ、淫らと結びつけられ、異常な行為、不潔な行為と見なされてしまった。性愛を描写する文学作品や映画は全面的に禁止され、性科学の展開も不可能にされるどころか、古代の性科学に関する書物の出版と閲読も完全に禁止されるようになった。性を語ることは禁止されるようになり、性は否定され、タブー視されてしまったのである。胡・島崎(1992)によれば、この時期の中国では、性に対して、封建時代以上に抑圧されていた。こうした性に対する極端な否定と禁忌は70年代末期の改革開放まで続いていた。

歴史を見渡し、宋の時代以前、性に対して、中国人は相対的に開放的な考えを持っていた。また、近代の女権の運動、新文化運動による西洋思想の受け入れは、ある程度中国に男女平等、女性解放の思想をもたらした。しかし、中国の長い歴史の中大半を占めているのは、やはり性への禁忌、女性への抑圧であった。したがって、改革開放までの中国は性に対して、基本的に閉鎖的であったと

言える。

2. 中国人の性の現状 — 改革開放から新しい性文化の形成

1978年以降、中国における政治、経済、その他の分野において、対外開放、対内改革、いわゆる改革開放政策の施行が始まった。西洋との経済の交流が盛んになるにつれ、西洋の文化や価値観も中国社会に浸透してきた。西洋で発せられた性革命や性解放の潮流も80年代から改革開放政策の実施に伴って中国に押し寄せ、中国人の性意識に重大な変化をもたらした。以下ではそれらの変化について具体的に明らかにしたい。

(1) 急激に変化している性意識

①晩婚化の進展と家族形態の変化

2003年の『中国統計年鑑』のデータから見ると、中国人の結婚する年齢はいつそう遅れている。1990年代に入ってから、中国の女性の平均初婚年齢⁴は着実に上昇し始まった。1991年、中国の女性の平均初婚年齢は22.23歳で、1996年23.20歳になり、2001年24.15歳まで上がった。都市化の程度が高い北京や上海の女性の平均初婚年齢は全国水準より高い。1991年、北京の女性の平均初婚年齢は24.44歳で、2001年は25.20歳で、0.76歳増大した。上海は1991年女性の平均初婚年齢は24.31歳で、2001年は25.29歳で、ほぼ1歳増大した(張翼, 2004) また、近年、中国では、独身という選択肢を選ぶ30歳前後から40代までの高い学歴をもち、高い収入を得ている女性が増加している。中国ではこのような女性は「独身貴族」と呼ばれている。『中新網』の報道によると、2003年北京で5000～15000元(約7万～21万円)の月給を得ている女性を調査したところ、独身者は全体の50.2%を占め、一部の会社では女性社員の75.3%が独身であることが明らかとなった。初婚年齢の延期や独身人口の増加は、中国の家族形態を大型化から小型化への転換をもたらした。中国の経済の中心と呼ばれている大都市上海では単身世帯の比率は年々増加している。1995年に53万世帯であった単身世帯は2000年に59万世帯にのぼり、2010年に75万世帯、2020年に89万世帯に増加すると予測される。そして単身世帯の世帯総数に占める割合は1995年の11.9%から2000年の12.4%に変わり、2010年は13.3%、2020年は14.4%と次第に上昇する見込みである(植田・古澤, 2002)。

この他、「ディンク家族」⁵の出現は中国の家族形態の小型化をさらに推し進めた。「ディンク家族」とは出産しないという意志を持つ家庭のことである。「ディンク家族」は、20世紀60、70年代欧米で流行し始まり、80年代から中国に現れてきた。上海の人口の情報センターの1部の資料によると、1979～1989年、上海の「ディンク家族」はおよそ全市の家庭の総計の2%～3%を占めて、人数は5万を上回ると推定される。1984年以来北京市の既婚の夫婦の中およそ20%が自らの意志で出産しないことを決めて、7万人に達している。1986年広州市は結婚して出産したくない人はわずか3万人であったが、1989年末、10万人まで激増した⁶。上海市婦人連合委員会2002年行った調査では、上海の「ディンク家族」はおよそ全市の家庭の総計の12.4%を占めており、2002年中国全土の「ディンク家族」の数は60万以上存在する⁷。

このように、近年の中国では、晩婚化が進み、単身家族と「ディンク家族」は増加しつつある。

②離婚率の上昇

改革開放後、中国で離婚が急増している。80年代から本格的に進められた改革開放による経済的・文化的な変化につれて、中国人の性意識は変わりつつあり、それにしたがって離婚も年々増加する傾向を辿っている（胡・島崎，1992）。

1980年新しい「婚姻法」が発布され、これは離婚率の上昇に拍車を掛けた。80年には34.1万件、83年には42万件、84年には45万件、85年には50万件、87年には58万件、88年には65万件という数字であった⁸。その後、1990年81万件、91年86万件、94、95年100万件を突破し、97年の離婚件数は既に82年の2.6倍まで上昇した。99年離婚の件数は120万件で、離婚率は13.54%に達した⁹。2004年5月中国民政部は2003年民政事業発展統計報告を公表した。この報告は2003年中国の離婚率は前年度に比べて更に増加したことを示している。2003年離婚件数は2002年より15.4万件増加、133.1万件までのぼった¹⁰。また、近年女性の自ら離婚を切り出す割合は、顕著に上昇することが目立っている。概算統計によると、中国全土各地の離婚の事件の中で女性が原告とするものは70%占めており、社会学専門家たちはそれを「休夫」¹¹と称する。さらに、教育レベルの高い女性は離婚を申し出る割合は高い。原告として離婚を求めている女性の中、86.1%の人は高い学歴を持っている。教育レベルの高い女性は経済の面でも心理の面でも独立意識が強く、婚姻に対する期待も多い。自分の望んでいた結婚生活が実現できない場合、これらの女性は男性に頼らなくても生きていけるので、自ら離婚を求める（郭 輝，2001）。離婚原因から見ると家庭内暴力によるものがまだ多いという現状は存在しているが、女性が自ら離婚を求める割合の増加は中国人の性意識には大きく変わりつつあることのあらわれである。

③不倫問題の深刻化

改革開放後、中国人の愛情観は多様化した。これは主に「婚外恋」、「第三者」、「包二奶」現象の増加によって示される。「婚外恋」は現在の婚姻関係を維持しつつ、婚姻関係以外の他人と恋愛関係を保つ行為である。「第三者」は男女の三角関係を引き起こす夫婦以外の者を指し、当事者のうち一方か双方とも結婚しようとする意思がある。「包二奶」は既婚の男性は金銭などの物質的利益を提供し、婚姻関係以外の異性を養うという現象をさし、言わば、現代の蓄妾現象である。この三つの現象は日本語の不倫にあたる。

中国版キンゼイ・レポートと言われた「性文明」の調査¹²では、半数の人たちが浮気や不倫を容認していたことがわかった。「既婚者に婚外恋（不倫）の是非を問いかけた質問に、都市部では54%、農村部でも44%の人たちが肯定した」（劉，1998，p. 12）。不倫への容認はある程度で不倫行為を放任した。

新中国の建国直後から70年代末期までの間、蓄妾が法律によって明確に禁止されたため、蓄妾の風習は中国社会から根絶したかに思われた（白水，2001）。しかし、近年、改革開放政策のもとで、人々の生活が豊かになり、包二奶（蓄妾）の現象が中国の各地、特に沿海部で再び見られるようになり、これに関する報道の多さは事態の深刻さを物語っている。ある省の21の市における婦人連合会の報告によると、1992年から1996年まで、当省の女性が夫の「包二奶」で苦情を訴える件数は20246件あり、しかも年々上昇している。さらに、「包二奶」現象は隠蔽性を持つため、統計することができない「包二奶」が大量に存在することが想像できる¹³。

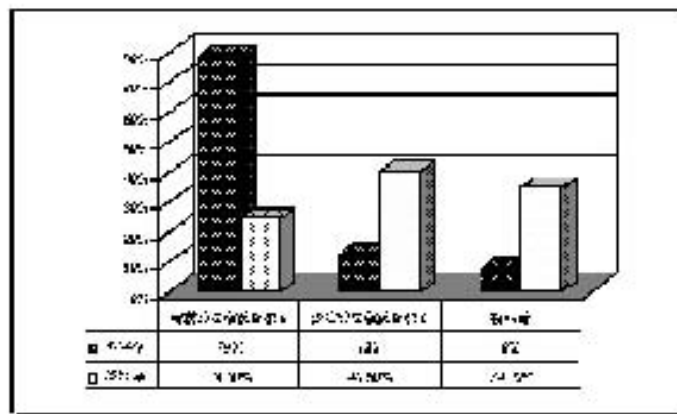
中国の伝統的な道德理念では、婚姻関係以外の性交渉は社会倫理からみても道德的にみても許されないことであった。しかし、近年、「婚外恋」、「第三者」、「包二奶」といった不倫問題の深刻化は、中国人の性に関する価値基準が伝統的な道德理念から離れつつあることを示している。

④婚前性交渉の急増

近年の社会・文化の進展は性の自由化・開放化を招き、それは性行為の早期化・低年齢化につながっている（白佐他，2001）。2004年、中国全土の大学生における性文化調査の結果では、男女双方が合意すれば性行為を行ってもよいと考える人が32%、また、ただ愛情さえあれば性行為を行ってもよいという回答が20%、将来的な結婚生活に順応するためが7%、結婚の妨げにならなければよいというのが8%、つまり、婚前の性行為を肯定的に考える学生が67%に達した。また、「相手の感情を傷つけないから受け入れる」が12%、この部分の数字を含むと、婚前の性行為に対して、開放的な態度を取る人の割合は80%近くになる。この調査の結果は15年前の1989年の同類調査の結果に比べると、婚前性行為に対して開放的な態度を取る人の割合は54%あまり増加した。この50%余りの差は、中国の若者が性に対してかなり開放的な考えを持つことを意味する。図1はこうした変化を示すものである。また、「青春健康」プロジェクト⁴の報告によると、社会的・経済的構造の影響の下で、青少年における性の成熟は早期化・低年齢化の傾向が顕著である。中国の青少年における性の成熟年齢は20世紀70年代に比べて、4～5歳早まっている。性成熟の早期化は婚前性行為の低年齢化につながっている。現在の21歳の若い人の中で79%は婚前性行為があつて、農村の地区でこの割合は80%を上回って、婚前性行為は低年齢化した。

婚前性行為への容認は、「餓死事小、失節事大」（女性は自分の貞節を命より大事にし、貞節を失ったら命を絶つべきである）、「貞女不嫁二男」（貞女は二夫をふまえず）という伝統的な価値観が崩壊しつつあることのしるしである。

図1 婚前性交渉に対する意識調査（2004年と1989年の比較）



(http://news.searchchina.ne.jp/2004/0202/national_0202_002.shtml及び

総務庁青少年対策本部「世界の青年との比較から見た日本の青年」世界青年意識調査報告書、1989年のデータに基づいて作成)

⑤性産業の台頭

新中国が誕生した直後、政府が売買春を厳しく取り締まり、法律によって処罰することで、売買春は中国で完全に取り除かれた。だが、改革開放以来、売買春は中国社会に復活し、沿海部から全国まで広がった。今日の売春婦は自ら性の商売に足を踏み入れていくとの指摘もあった¹⁵。1989年、上海の公安局の調べでは、わずか半年で売買春の疑いで取り調べを受ける人は2万6千人もあった。広州では、1979年に逮捕した売春婦の数を一とした場合、1985年では40で、1987年では240で、1992年では572である¹⁶。ここ数年、中国の売買春はさらに急速的に増えている。北京を例として考えてみよう。1999年北京市の警察は小さいヘアサロンや洗浴センターなどを調査し、売春と買春の人を400人以上逮捕し、調査して処分した風俗店は6000軒を越えた。2000年7月に北京の警察は集中的に小さいヘアサロン、カラオケ、銭湯、バー、ビデオショップなどを調査した。そして、ポルノや売買春に関わる4101人を押収し、違法経営で1866軒の店を処分した。大規模な売春宿では売春婦は百数人が入れ、小さいヘアサロンでも5～10名の売春婦がいる。少なくとも北京市の売春婦の数は20～30万までいると推測される¹⁷。

2003年9月18日に買春の天国と呼ばれる広州で発生した日本人集団買春事件は、中国の多くの報道紙によって報道された。2003年9月28日の中国紙『中国青年報』によれば、9月17日未明、同市の「珠海国際会議センター大酒店」に乗り付けた大型観光バスなどから、日本人と見られる男性が水商売風の中国人女性を同伴して次々に現れ、女性だけで500人近くになった。目撃者が同行の通訳から聞いたところ、団体は総勢380人いたという。また、2003年9月30日の新聞紙『華西都市報』の報道では、16日の夜、300数名の日本の観光客が買春の要求を出した後に、およそ1時間後、日本人の宿泊先のホテルに200人以上の売春婦が集まった。こんな短時間内で数多くの売春婦が集まったということは、中国の売春婦の数はもの凄く存在している事実を推定できる。

⑥ポルノ情報の氾濫

80年代前まで性に関わる文学作品や映画作品などは、ブルジョア的低俗趣味とされ長期間にわたって禁止されていた。しかし、経済発展による急激な外来文化の流入により、中国におけるポルノの氾濫は顕著になりつつある。中国政府は取り締まりをするものの、地下の販売ルートの発達やインターネットの普及によって、ポルノ情報は容易に入手できる一方である。こうしたマスコミからの性情報は人々、特に若者の性意識や性行為に大きな影響を与えている¹⁸。白佐らの2001年に行った性知識の情報源に関する調査によると、中国では、最初に得た性の知識は、「本・雑誌」が最も多く、男子の48.0%、女子の41.9%を占める。次に多いのは「映画・テレビ」で、男子の22.4%、女子の35.5%を占める。また、同調査では、これまでに得た性知識の情報源は何であったかを聞いたところ、中国の男子の86.8%、女子の85.8%は「本・雑誌」から、男子の58.8%、女子の67.9%は「映画・テレビ」から得たと回答している。マスコミが、若者の性知識の主な情報源であることはポルノが氾濫している実態を示している。

ここ数年、インターネットの普及によって、中国政府のポルノの取り締まりは困難を極め、ポルノ情報の入手はさらに容易になった。2003年の「木子美」現象は、インターネットによるポルノ情報の氾濫の実態を物語っている。「木子美」は、ペンネームで、広州市のある20代の雑誌の女性記者である。彼女は自身の性生活を生々しく記述した日記をインターネットで公開した。公開したの

は性生活の実景だけではなく、性生活における男性の実名も含まれている。「遺情書」と名づけられた日記のサイトに多くのアクセスが殺到した。その後、「遺情書」が印刷・製本されたが、政府当局の販売差し止めが入り、発禁処分を受けた。しかし、海賊版はいたるところに出回っていて、購買層は10代から20代前後の若者が多いという。

(2) 改革開放後における性開放の特徴

改革開放政策が実施された以後、中国は飛躍的な経済の発展を実現した。しかし、海外との経済の交流が盛んになるにつれ、外来文化も避けることができなく、中国に流れ込んできている。経済と文化の変容は、中国人の価値観や人生観を大きく変え、中国人の性意識をより自由化にさせた。前述した晩婚化の進展、離婚率の上昇、婚前性交渉の増加、性産業の復興および性情報の氾濫は、これまで性をタブー視してきた中国に性文化の革命が発生していることを示している。こうした変化は以下の特徴を持つと考えられる。

①家本位から個人本位への転移

中国の伝統理念では、結婚や生育は、子孫を残すためであり、家族のためである。つまり、伝統的な婚姻観や性意識は、個人の利益を犠牲にした家（集団）の存続繁栄に従うものであり、家本位の色彩が濃厚であった。しかし、経済の発展に伴って、個人の経済上の独立につれ、恋愛、結婚、生育において、個人の自主性を追求することができるようになった。さらに、西洋の性自由、性開放の思潮の浸透によって、中国社会は個性化へと拍車を掛けた。今日の中国の若者は、恋愛、結婚、生育について、親あるいは家族ではなく、若者自身が主導権を持っており、いつ結婚するか、または生育するかどうかについて当事者によって決められる。さらに、ここ数年、快楽や快適を追求する人々は増えている。これは無責任感や不倫や乱倫などの社会問題につながっている一面を否定できない。個性化の推進によって、中国人の性意識や婚姻観は家本位から個人本位へ転移しつつある。

②伝統意識の弱化と残存

西洋文化が主張した性自由・性開放は、伝統的な中華思想とは互いに受容できないものである。しかし、外国からの情報を避けることができず、中国は性自由・性開放の思潮に巻き込まれている。婚前性行为、婚外性行为は伝統的な中国の価値観では、考えられないことであるが、今多くの中国人は寛大な態度を取っている。中国人の従来の性倫理や性意識は少しずつ忘れられ、薄くなってきている。一方、性産業の復興、家庭内暴力の存在、「包二奶」現象の出現などは、「男尊女卑」という意識が、依然として中国人の脳裏に根強く残っていることを窺わせる。

③多様化における混乱

上で述べたように、中国の伝統意識は崩壊しつつある方向に向かっている。だが、数千年に渡ってすでに中国人の脳裏に根付いた伝統的な性意識、性倫理を短時間で完全に消すことは不可能である。中国人は、性に対して、伝統思想からの影響が弱くなったとはいえ、依然としてその影響を受けている。また、中国では、経済の発展の程度が東の沿海部と西の内陸部、都市部と農村部の間大きな差が存在している。無論、西洋文化の浸透にも差がある。こうした背景の中、中国人の性意識は多様化している傾向にある。そして、知らず知らずのうちに中国人の頭の中で起こった新しい思想と伝統的理念の衝突は、認識の混乱を招いている。さらに、西洋文化を正確に理解できない人も

たくさん存在している。たとえば、劉（1998）が指摘したように、中国人が不倫や浮気を認めているのは、不倫や浮気を性解放と勘違いしているからである。このように、中国人は性意識の多様化とその混乱に直面している。こうした多様化と混乱の中、中国ではさまざまな社会問題が引き起こされた。

（3）性意識の変化により引き起こした社会問題

①性病とエイズの出現

新中国建国後、中国では性病が基本的に撲滅されたが、80年代に入ってから、性病は中国で再び現れ、全国に急速に蔓延している。

中国衛生省に登録された統計によると、1980年における中国全土の性病患者数はわずか48であったが、1981～1989年には、毎年、平均124.31%のスピードで急増している。1989～1997年の間、増加のスピードが落ち着いてきたが、それでも年間10～25%の範囲で増えている。1998年全国で63万人が性病にかかっていると報告され、1997年より37.05%上がった。『北京晨報』（2002年4月12日）は、中国の性病患者数は2001年は前の年より30%以上増加し、83万人まで上ったと報告した。北京などの大都市では、患者数の増加率は40%を超えている。さらに、当紙によると、政府の統計は氷山の一角しかなく、実際に中国全土の患者数はすでに600万～800万人に到達していると専門家が推測した。性病の蔓延に伴い、中国政府を悩ませる最も深刻な問題はエイズの急拡大である。1985年中国では初めてのエイズウイルス（HIV）の感染者が報道されて以来、10年後の1995年までに感染者数は5～10万人まで上昇した¹⁹。2002年中国政府は全国の感染者が推計100万人に達したと発表し、年々30%のペースで増加しつつ、対策を怠れば2010年には1000万人に達するとの衝撃的な予測を示した²⁰。

②未婚妊娠と人工中絶の増加

1980年代以降、中国では未成年者の性行為が急増し、若者の間での性行為が低年齢化している。その結果、中国では未婚妊娠や人工中絶の数が著しく増加してきた。中でも、青年層の中絶の増加が注目されるようになった。望まない妊娠をしている女性の多くが、まだ性知識が不十分な少女達なのである。重慶市計画出産科学研究所の統計データによると、2002年中国における妊娠中絶数は149.3万件、そのうち未成年者は40万件を占めた。また、同市計画出産医院のヘルプセンターが2003年に設立されて以来、毎月平均して30～40人の少女が訪れ、中絶手術を受けている。その中で最も多い年齢層は16～17歳の高校生で、最も若かった少女の年齢はわずか12歳であった²¹。

③犯罪率の上昇

売春、風俗営業などの性産業が日増しに増加している。風俗営業は往々にして直接的にあるいは間接的に高い利益を伴うものであるため、暴利を貪る者は性産業に目を向けている。成年あるいは未成年の女性を売買して売春を強制する犯罪は中国全土に存在している。また、家庭の解体、社交範囲の拡大、情報ルートの多様化は、青少年の偏った道に歩む原因となっている。80年代後半、特に90年代に入ってから、中国の青少年における覚醒剤の服用者は急激に増加している傾向にある。1988年、初めて公表した麻薬常用者の数は5万人登録され、89年7万人で、91、92年はそれぞれ14.8万人、25万人であった。その後、94年は37万人で、95年は52万人、97年は54万人まで上った。麻薬

使用者の中で、80%以上は青少年である（周，2000）。麻薬の服用と性の乱れとは強い関連がある。薬の興奮によって性行為を行ったり、また、薬品代を稼ぐため、売春をする人が増えている。周（2000）によれば、1994年広州市のある区の青少年の違法犯罪の事件の中で、麻薬服用による犯罪は1080件あって、全体の80%を占める。また、女性の麻薬常用者の90%以上に売春行為があった。

④性教育の欠如

性意識の急激的な変化は、中国における性教育の重要性和緊迫性を提起した。中国は、地域が広く、各地域の経済水準や風俗習慣がかなり異なっているため、性に対する認識や態度にも大きい差異がある。学校性教育の実施状況から見ると、熱心にやっているところもある反面、全くやっていないところもある。前述したように、中国の若者の性に関する情報のほとんどは本・雑誌または映画・テレビから入手したものである。こうした情報の中には、正確・適切でない内容が含まれていたり、一方的でセンセーショナルな内容であったりする可能性が高いため、青少年の性意識、性行動を誤った方向へ導く恐れがある。また、白佐ら（2001）の行った性情報・性教育の調査は、中国の性教育の現状を示している。同調査によると、中国において、「人工妊娠中絶」については男子の54.9%と女子の74.4%が、「性感染症」については男子の54.5%と女子の64.3%が、「エイズ」については男子の54.5%と女子の62.8%が、「習わなかった」と答えている。性教育の欠如は人々の性知識の欠乏を導く。2004年北京大学の婦人児童保健センターとWHOが連携して行った、北京、鄭州、南寧、深川にある、10の病院において人工中絶を求めている2002人の未婚女性を対象とした性と生殖健康の調査では、調査した女性の中性感染症にかかっている人は57.1%に達している。性知識に関する9つの極めて簡単な質問に対して、正しく回答したのはわずか1.2%であった。性教育の遅れは性病の伝播、エイズ感染者の急増につながっている。

あらゆる変革はリスクを伴うものである。中国における経済の改革は、経済の飛躍的發展を実現し、中国社会の変容をもたらしたと同時に、これらの変容に伴う社会問題も表面化し、顕著化している。中国はこれらの問題の解決といった新たな課題に迫られている。

改革開放後性意識変化の要因

1978年改革開放の政策が実施されてから20年あまりの歳月が流れた。この20数年間、中国は、経済状況の急速的な変貌を遂げた。経済の発展と同時に、人々の価値観や行動様式においても巨大な変化が生じている。婚前性行為や婚外性行為に対する容認、ポルノ情報の氾濫、離婚率の上昇など、閉鎖的な伝統思想によって支配された従来の中国では考えられない出来事があった。中国人の性に対する考え方は大きく変化している。なぜこういった変化が現れたのだろうか。本稿はこうした傾向を助長する社会的・経済的・文化的な要因として、次の5つの側面に注目したい。

1. 各種の格差の拡大

80年代以降、長い間堅持されてきた社会主義的平等原則が放棄され、それに代わって、豊かになれるところから先に豊かになればよいとする「先富論」が認知されるようになった（植田・古澤，

2002)。「先富論」の原則の下で、一部の地域と個人は先に富裕的になった。しかし、アンバランスな発展の危険性を内包する「先富論」の欠点はここ数年浮上してきている。

(1) 地域間の格差

改革開放政策は政策的に東部・沿海部の経済発展を優先的に進め、西部・内陸部の開発を後回しにしたため、東西間で著しい経済格差が生じている。2002年、GDPの水準から見ると、上海や広東をはじめとする東部・沿海部では14000元を超える地域が数多く見られるが、内陸部では、ほとんどが7000元以下の低水準にとどまっている。GDPが最も高い上海市(40646元)と最も低い貴州省(3153元)の格差は、2002年時点では12.9倍もの開きが生じている(中国統計年鑑, 2002)。東西格差の問題が深刻化するなか、中国政府は西部・内陸部の経済発展を目指して、2001年から西部大開発プロジェクトをスタートさせたが、完全に解消するまで20年以上かかると言われている。

(2) 都市部と農村部との間の格差

中国では、計画経済から市場経済へ転換し、主に都市部を中心に豊かさを享受できる層と、農村部に多い貧困のまま取り残された層との格差が急速に拡大している。2001年、農村部における住民の一人当たりの年間純収入は前年度に比べて、4.2%増の2366元であった。これに対して、都市部住民の一人当たり可処分所得は前年度に比べて、8.5%増の6860元であった。農村部の収入は都市部と比べると、実際の金額は約30%、伸び率も約50%にとどまっている。あまりにも差が大きいため、政府の特別な支援がなければ、農村部と都市部との格差の拡大は緩和されることは容易ではないと思われる(重並, 2002)。

(3) 男女の収入の格差

改革開放以来、中国では高い学歴、高い収入を得ている「独身貴族」と呼ばれる女性層が存在しているが、女性の就業と収入の状況を全体的に見ても楽観できない。中華全国婦女連合会と国家統計局は2001年共同で、全国30省の404の県、市、区で暮らす48192人を対象に女性の社会地位に関する調査を行った。その結果、過去10年間で就職している女性の収入は大きく増加したが、男性との収入格差は拡大していることが明らかになった。調査によれば、1999年都市部で就職している女性の平均年収は7409元、男性の70%にとどまるなど、収入の男女格差は1990年と比べ7.4ポイント拡大した。都市部では、男女の収入格差は就職の状況と役職レベルに直接関係している。女性は収入が低い職業に集中し、同じ職業に就いていても役職が男性より低い傾向にある。最近では各レベルの責任者を女性が務めるケースも増えており、また専門技術者の割合も女性の方が高いが、女性の収入の点から見た場合、責任者では男性の58%、専門技術者では68%にとどまるなど、いずれも平均レベルを下回っている²²。

(4) 貧富の格差

近年、中国の住民の収入格差はますます開いている。李(1997)によれば、1994年、都市家族の収入では、収入最高位の1/5の人口が全収入の50.14%を占めており、最低収入の1/5では4.27%を占

めているにすぎない²³。高い層の総収入は最も低い層のほぼ12倍であると見積もることができる。

2. 雇用形態の改革

企業改革の一環として、雇用形態は「鉄飯碗」²⁴から契約制に転換され、企業側に人事管理の自由権は与えられた。企業は自身の経営状況に応じて人員を増やしたり、削減したりすることが可能になり、レイオフされた人の数が増え、失業率が高まっている。企業は運営コストを考慮するため、レイオフされた人の中の女性は全体の70%を占めている（馬玉珍，1998）。能力の有無は仕事の有無と給料の多少を決める要因となり、労働者間の競争が激しくなり、人々は「鉄飯碗」時代の安定感が失われた。また、終身雇用制の打破によって、国営企業の魅力が失われ、自営業を起業する人が増えている。同時起業した人の数多くは、中国の最も裕福な社会階層に入っている。雇用形態の変化は高い収入層と低い収入層の差を広げた。

3. 情報化の進展

中国政府では情報化で工業化をけん引するという国策の下、IT施策を積極的に推進している。2002年第1四半期、中国の家庭でのインターネット利用人口は、先進技術国の日本を抜いて世界第2位に浮上したと発表された。2002年、中国のインターネット人口は5660万人、2001年の2250万人に比べ大幅に増加した²⁵。特に経済が発達した都市において情報化の進展は迅速である。最新のデータによると、上海の一般家庭におけるパソコンの普及率は44%に達した。パソコンの普及につれてインターネット人口の数はかなりの勢いで増加している。上海の統計局の情報によると、2004年末までに上海のインターネット人口は310万人を超えるという²⁶。中華工商時報によると、中国の政治文化の中心である北京のインターネット人口は398万人で、北京市人口の28%を占めている。

4. 一人っ子政策の実施

一人っ子政策は、ほぼ改革開放の政策と同じ時期から実施された。子孫をたくさん残すことを結婚の使命として重要視してきた中国人は、生涯で一人の子しか産み育てることができなくなった「伝宗接代」（代々血統を継ぐ）伝統思想によって支配されてきた中国人は、男の子を望む人は少なくない。そのため、生まれた女の子が捨てられたり、売られたりする事件があった。また、女の子を生んだ妻と離婚したり、婚姻関係以外の女性と不倫したりする事件もあった。一方、中国の家庭では、一生に唯一生み育てる子供に対して、複数の子供を育てる以上の愛情を集中的に注がれた。過剰な愛情を受ける子供はまさに各家庭の「小皇帝」の存在である。こうした甘やかされた環境は、子供たちの自己中心の性格を形成した。また、一人っ子政策の実施につれ、従来の中国の儒教思想の中強調された親孝行の理念は、親が子供に尽くすという意識形態に変わってしまい、「子孫をたくさん残す」ということは事実上、不可能になった。

5. 伝統文化と外来文化の並存

改革開放によって、中国の経済、文化の窓が開かれた。多くの中国人はビジネス、留学、旅行のために国境を越えて中国以外の国の土地を踏んだ。これらの人たちは、他国における経済の発展し

た様子、人々の生活様式に関する情報を大量に中国へ持ち込んだ。また、情報化の推進によって、パソコン一台があれば、世界各地の情報にリアルタイムで接続できるようになり、インターネットを通して、外来文化は中国に浸透してきた。さらに、経済の交流に伴って、中国は公式、非公式の形で他国と文化の交流を盛んに推進している。結果として、外来文化は急速に中国へ流れ込んでいく。しかし、中国人の意識の中に深く根付いた伝統文化は決して完全に人々の頭から消されたわけではない。企業改革の中、真っ先にその矢面に立ったのはレイオフされた女性労働者たちであった。また、経済発展の格差等によって農村部と都市部、沿海部と内陸部の経済状況は大きく異なっている。農村部や内陸部では、生活水準の低下、交通手段の未発達、通信技術の遅れによって、外来文化がまだまだ浸透されていない状況にあり、伝統文化の影響はより強いと考えられる。

以上で述べたこの5つの要因は中国人の性意識の変容に大きく影響を与えている。都市部と農村部、沿海部と内陸部との経済の格差の拡大につれ、多くの人々が農村から都市へ、内陸から沿海へ移動する動きは勢いを落とさずに進んでいる。大量の流動人口の増加は、都市部と沿海部の過剰労働力として顕在化している。教育水準の低い流動人口は競争の激しい都市部や沿海部で仕事を見つけることが困難である。数多くの女性流動人口は売春婦の予備軍になっている。雇用形態の変化によって、貧富の差は激しくなり、お金は一部の少数の人たちに集中するようになった。一部の富裕層の豊かな生活を見て、周りの多くの貧乏層がこうした生活に憧れ、お金に対する執着心は強くなり、拝金主義の風潮は形成された。一部の人は拝金主義の力の下で、誤った道を進んでいる。「権力者たちの倫理観が低下して金があれば権力を買収できるし、権力があれば金も自然に入ってくるといわれるようになった」(千石・丁, 1992)。不祥事は相次ぎ発生する。不正の手段で金を入手する多くの官僚たちは、モラルなき贅沢三昧の生活を送っており、風俗店の常連客になったり、「包二奶」したりする。これは売買春、「包二奶」を助長するだけでなく、家庭の不安定ももたらし、離婚率の上昇につながる。また、雇用形態の変化に伴い、職場の競争が激しくなり、子育ての余裕が失われ、「デインク家族」の出現と深く関連している。さらに、収入が不安定になったり、夫婦の収入の差が拡大され、アンバランスになったりするといった、経済的破綻による離婚の増加も企業改革後に増えてきている。情報技術の進歩によって、人々の生活にさまざまな変化が見られるようになった。ネット恋愛は一種の新しい文化として中国で流行している。上海離婚法律諮訊網が発表した最新のデータによると、不倫が直接的な原因で離婚に至るケースが急増し、全体の6割を占めている。中でもインターネットで恋人を見つけるネット恋愛が新たな不倫スタイルとして増加している²⁷。また、インターネットは、外来文化が流入する一つの重要なルートになり、ある程度中国人の性意識の変容を促した。そして、「一人っ子政策」の実施は、中国の伝統的な親子関係を変え、自己中心の一世代を育てた。この世代の人は自分の快樂と快適を追及し、自由と開放を求めている。これは若者たちの婚前性行為に対する態度によって表されている。この他、家庭内暴力による離婚件数の多さ、多くの女性が自ら売春婦になったり、妾になったりすることから見ると、中国では「男尊女卑」の伝統意識がまだ深く人々の行動に影響している点も見落とすにはいかない。これらの経済的・社会的・文化的要因が相まって、今の中国人の性意識の変容を導き、現在の中国人の性意識を形成した。

おわりに

広く「性」の諸問題は、人間の一生に関わることであり、人々の毎日の日常生活にも深く関わりをもつことであるため、誰もが避けて過ごすことができないものである（白佐他, 2001）。この性の問題は、人々を取り巻く経済的・社会的・文化的環境などの影響を強く受けている。そのため、人々の性意識は、経済的变化、社会的・文化的変化に伴い、時代とともに著しく変化しているのである。

中国の70年代末期から行われた改革開放は、経済的・社会的・文化的環境を一気に変貌させ、中国に性の革命をもたらした。晩婚化が進み、単身家族、「デインク家族」が出現し、離婚率も上昇している。婚外性行为や婚前性行为がますます多くの人に容認されるようになり、性産業やポルノ情報が氾濫するようになっている。こうした改革開放以後に現れた一連の現象から見ると、中国人の性意識は、根本から揺さぶられるようになり、保守的・閉鎖的から自由的・開放的へ転換しつつある。今の中国人の性意識の現状として、第一に、家本位から個人本位への転移、第二に、伝統意識の弱化と残存、第三に、多様化の混乱といった三つの特徴が挙げられる。こういった特徴を持つ性意識の変容の中、一方では、それまで抑圧され、タブー視されていた性について、開放的かつ正確的に認識されるようになり、科学的研究も行うことができるようになった。他方では、西洋の性自由、性解放の思想が、中国の人々の価値観や行動様式に大きな影響を及ぼし、性に対する意識や行動の混乱を引き起こし、これに関連する過去に出会ったことのない社会問題が顕在化するようになった。あらゆる物事の変化の裏にはそれを引き起こす要因が存在している。中国における性意識の変容もさまざまな経済的・社会的・文化的要因が重なった結果である。これらの要因として、次の五つの点が考えられる。すなわち、第一は、地域間の格差や貧富の格差といった各種の格差の拡大である。第二は、雇用形態の改革である。第三は、情報化の推進である。第四は、一人っ子政策の実施、第五は、伝統文化と外来文化の並存が挙げられる。

これらの要因の中、領土の広い中国では各種の格差を縮小させるにはかなりの時間がかかる見通しである。経済の活発によって、雇用形態はいつそう多様化する方向に向かうと考えられる。また、情報技術の進歩によって情報化もさらに進化するであろう。依然として人口問題を抱えている中国では一人っ子政策を緩めていく可能性があるものの、完全に廃止されるにはまだまだ時間が必要である。そして、数千年に渡って形成された伝統文化は、しばらくの間中国から完全に除かれることが不可能であろう。つまり、こうした要因はこれからも続いて存在するのである。言うまでもなく、これらの要因による性意識の変容も続いていくと思われる。すなわち、これから中国人の性意識はさらに開放的な傾向に進んでいくのである。また、性意識の転換に伴う社会問題は短期間に解決される可能性が低い。こうした新しい情勢の変化に対して、中国に性教育を強化させ、性病やエイズ問題を防止する素早い対応が求められている。

注

1. 2003年中国では、ある20代の女性は、「木子美」というペンネームを使って、自身の性生活を赤裸々に綴った日記をインターネットで公開し、中国伝統文化にかなりの衝撃が走った。「木子美」は2003年度の中国の流行語になっ

- た。詳しく第2節 (p. 7) を参照。
2. 出所：『医心方』卷第二十八「至理第一」。
 3. 売買婚とは、結婚を条件に男性側から女性側に相応の財物を提供するという結婚システムである；童養媳とは、一生働いても息子の嫁入りの費用を稼ぐことができない家庭が、安い幼女を買って、女性労働者として働かせ、成長すると息子と結婚させるという結婚システムである。
 4. 一般的に言えば、一つの国の人口の平均結婚年齢を評価するとき用いられる指標は女性の平均初婚年齢である。同じ時期において男女の平均結婚年齢の差が既定の場合、女性の平均初婚年齢の変化は、人口の平均初婚年齢の変化を反映している。
 5. 「ディンク家族」、英語ではDINK, Double Income No Kids の略である。中国語では「丁克家庭」という。
 6. 「DINK家庭在中国」『南風窓』1992年第9期を参照。
 7. <http://news.21cn.com/social/shixiang/2002-11-15/834478.html>によるものである。
 8. 『福州晩報』1999年6月16日を参照。
 9. 「離婚財産分割：性別差異及其婦女的脆弱性的成因」『黒河市婦女連合会』2001年5月11日の報告を参照。
 10. 『中国新聞網』2004年5月7日を参照。
 11. 1949年以前、女性は離婚を求める権利はなく、離婚する権利はすべて男性側が握っていた。離婚することは「休妻」と言う。今の中国では、離婚の件数の中女性側が自ら離婚を求めるケースは大半を占めているので、「休夫」と言われる。
 12. 「性文明」調査とは、中国における性科学の第一人者と呼ばれる劉達臨教授が指揮し、1989年2月から、中国全土の約2万7千人を対象に実施した世界最大の性の聞き取り調査である。これは中国有史以来最初の事であり、規模の上ではアメリカの学者キンシーが行った性に関する調査（17000例）を凌ぐものである。
 13. 「透視中国 “二奶” 现象」『青年文摘』2001年2月を参照。
 14. “青春的健康” のプロジェクトは米国のフォードの基金からの出資を受け、北京、天津、広州などの12の大都市で展開する。このプロジェクトは広大な青少年に対して性教育を行って、安全性かつ責任感がある性行為の重要性を強調し、青少年の性と生殖の知識のレベルを高めて、健康な意識と自分を守る力を強める目的としている。
 15. たとえば、劉（1998）。
 16. 劉（1998），p. 108を参照。
 17. 『中青網』2004年8月24日を参照。
 18. 胡（1995）の中国の高校生を対象とした調査では、性意識や性行動に最も影響を与えているのはマスコミからの情報であることを示している。
 19. 『中国教育報』1995年12月3日を参照。
 20. 『北京青年報』2002年11月19日を参照。
 21. 『東海国際新聞』2004年5月10日を参照。
 22. 『人民網』2001年12月26日を参照。
 23. 収入格差を測定する際に通常採用される方法としては、収入5分位によって人口を捉える仕方であり、それによって、総人口の全収入にたいして1/5の層の人口の収入が占める割合を見ることができる。
 24. 「鉄飯碗」とは、もともと鉄を材料として作られた壊れにくい茶碗の意味であり、「終身雇用制」の喩である。中国は1949年から改革開放前まで「鉄飯碗」のシステムを取っていた。
 25. <http://japan.internet.com/ispnews/20020517/1.html>のデータによるものである。
 26. 『東海国際新聞』2004年6月10日を参照。
 27. 『東海国際新聞』2004年5月10日を参照。

参考文献

- 陳鳳（2002）。「中国における改革開放後の婚姻観の変化とその社会・経済的要因：山西省のある『婚姻紹介所』の記録を手がかりに」神戸学院大学『人間文化』16号。
- 丁娟（1998）。「20世紀中国女性の思想」『中国の女性学：平等幻想に挑む』秋山洋子・江上幸子・田畑佐和子・前山加

奈子編訳，勁草書房。

- 郭 輝 (2001). 「離婚財産分割：性別差異及其婦女的脆弱性的成因」『黒河市婦女連合会』2001年5月11日の報告。
- 胡霞 (1995). 「中国高校生の性意識・性行動」『青少年問題』Vol.42, No.10.
- 胡霞・島崎継雄 (1992). 『中国人の性事情』サイマル出版社。
- 江曉原 (1995). 『性張力下的中国人』上海人民出版社。
- 重並朋生 (2002). 「中国農村部経済の現状と課題」『みずほりポート』6月12日，みずほ総合研究所。
- 孔健 (1988). 『ザ・中国人』学生社。
- 李強 (1997). 「改革開放後の中国社会階層構造の重大な変化」『立命館産業社会論集』Vol.33, No.3.
- 劉達臨 (1998). 『中国13億人の性』講談社。
- 馬玉珍 (1998). 「改革開放における中国女性の就労問題」『市政研究』120号，大阪市政調査会。
- 孟昭華・王明寰・吳建英 (1992). 『中国婚姻与婚姻管理史』中国社会出版社。
- C.Meyer (1986). *Histoire De La Femme Chinoise*, Jean-Claude Lettès. (辻由美訳『中国女性の歴史』白水社，1995.)。
- 瀬地山角 (1996). 『東アジアの家父長制：ジェンダーの比較社会学』勁草書房。
- 千石保・丁謙 (1992). 『中国人の価値観』サイマル出版会。
- 白水紀子 (2001). 『中国女性の20世紀：近現代家父長制研究』明石書店。
- 白佐俊憲・今野洋子・星信子・佐々木邦子 (2001) 『日本と中国の青少年の性意識・性教育』川島書店。
- 鈴木未来 (1999). 「改革開放以降の中国における家族問題」『立命館産業社会論集』Vol.35, No.2.
- 植田政孝・古澤賢治 (2002). 『アジアの大都市：北京・上海』日本評論社。
- 張翼 (2004). 「中国人口総量的増長与結構変化」『中国社会学網』1月15日，中国社会科学院社会学研究所。
- 周振想 (2000). 「当前中国青少年吸毒問題研究」『中国青年政治学院学報』1月号。「DINK家庭在中国」『南風窓』1992年9期，『南風窓』雑誌社。「透視中国“二奶街”現象」『青年文摘』2001年2月。
- 総務庁青少年対策本部 (1989). 「世界の青年との比較から見た日本の青年」『世界青年意識調査報告書』。
- 『中国統計年鑑』(2001). 中国統計出版社。
- 『中国統計年鑑』(2002). 中国統計出版社。
- 『中国統計年鑑』(2003). 中国統計出版社。

